

我がすむ里

おがわ・たいどう

作者：小川泰堂（1814-1878）

成立：文政13年（1830）



解題

Keyword

- 藤沢
- 「雞肋温故」
- 「藤沢名所図会」
- 平野道治
- 大窪詩仏
- 「高祖遺文録」
- 「日蓮大士真実伝」
- 私撰地誌

藤沢宿とその周辺の地誌。後に『新編相模国風土記稿』（#23）となる幕府の地誌調査が進行していた時期、一青年が地元を探訪して記録した著作である。藤沢市総合市民図書館の伝統ある郷土研究誌『わが住む里』は本書にちなんでいる。

■ 成立と諸本

本書の成立と来歴については、唯一の翻刻本『藤沢市史料集2』の解説及び金沢甚衛の論文から次のように推察される。初稿の成立は文政13年（1830）6月、書名は『雞肋温故（けいろくおんこ）』だったようである。著者小川泰二（原著の表記、後の泰堂）はこれに何回か改訂を施し、天保5年（1834）ごろ成稿を得たとされる。そして時代を下った元治元年（1864）春、泰堂の末弟道国（秀岳）らによって本書の出版が企てられ、『我がすむ里』と改題、新たな序文と挿絵18枚を加えた稿本が作成された。結局この稿本は刊行されなかったらしく、現在小川家に伝えられている。『藤沢市史料集2』が翻刻の底本としたのは慶応義塾図書館所蔵の写本で、小川家本と同内容とみられる。なお、書名は小川家本が外題「我棲里」内題「我が住む里」、慶応本は外題「藤沢名所図会」内題「我がすむ里」と異同があるが、ここでは翻刻本採用の『我がすむ里』に統一した。

また、天保5年の稿本をもとに藤沢宿の旅籠「ひらのや」主人で文人の平野道治が大幅に改訂を加えた『雞肋温故』が天保13年（1842）に成立し、伝存しているが、これも『藤沢市史料集2』に翻刻・収録されている。

■ 作者

小川泰堂は藤沢の医師小川天祐の長男として文化11年(1814)に生まれた。幼名、泰二郎。本書の初稿を書き上げたのは弱冠16歳の時である。その後、江戸で医学を修めるとともに、漢詩人・大窪詩仏(おおくぼ・しぶつ)の下で学び、詩文・書画・茶道・雅楽・柔術等に通じる。江戸で医業を営む間に日蓮宗に帰依し、その布教と研究に励んだ。父の死を機に天保13年(1842)藤沢の実家(笑宿菴)に帰り、医業と著述活動を継続していたが、安政6年(1859)家督を弟の医師道国に譲って隠居、泰堂を名乗って執筆に専念し、日蓮の遺文を校訂・編纂した大著『高祖遺文録』や日蓮の伝記『日蓮大士真実伝』をはじめ、評論・紀行・詩歌等、広い分野に多数の著作を残した。明治11年(1878)65歳で藤沢に没した。

■ 内容

上中下3巻から成り、藤沢と周辺の山川・社寺・史跡等、70余りの項目を解説する。個人が書いた小著であり、『新編相模国風土記稿』のような体系的・網羅性はなく、やや正確さに欠ける点もあるが、『風土記稿』にない項目や記述がより詳細な項目もみられる。地域に密着した私撰地誌として史的意義をもつといえる。なお、平野道治の『雞肋温故』は原著から藤沢宿以外の項目を除き、記述を簡潔にするとともに、原著の誤りを訂正しているところもある。



史料本文を読む

<翻刻本>

- ◆「我がすむ里」(『藤沢市史料集2』藤沢市文書館 1976 [K27.52/3/2])
(索引あり) ※平野道治「雞肋温故」の翻刻を併載。解説を付す。



史料についてさらに知る－参考文献－

- 『小川泰堂伝』小川雪夫著 詩仏泰堂両翁追憶記念会 1940 [K28.52/1]
- ◆大野守衛「泰堂・詩仏・笑宿菴」(『わが住む里』(4) 藤沢市図書館 1952 [K05.52/1])
- ◆金澤甚衛「同名異種「雞肋温故」考」(『わが住む里』(9) 藤沢市図書館 1957 [K05.52/1])
- ◆三浦俊明「東海道藤沢宿関係の地誌について」(『藤沢市史研究』(13) 藤沢市文書館 1979 [K21.52/12])
- 『小川泰堂全集 論義篇』全集刊行編集委員会編 展転社 1991 [K18.52/64]
- ◆高野修「小川泰堂とその時代」(『藤沢市史研究』(34) (続)藤沢市史編さん委員会 編 藤沢市文書館 2001 [K21.52/12])